新関　公子 (大学美術館)

「私の寄贈資料について」

　私は本学の芸術学科で西洋美術史を専攻しました。卒論は「シュルレアリスム研究―その心理学的側面と哲学的側面について―」というものでした。その後さまざまな主題と時代を遍歴してきたつもりでしたが、今考えてみると、出発点で出会った主題は常に引きずっていたということに気づきます。その主題とは「文学と美術の出会い」ということです。４０代の終わりにテーマにした『ダリ』は一人の存在のなかに文学者と美術家が共存している人でした。５０代になって書いた『漱石の美術愛推理ノート』は、漱石がいかに美術から多くのインスピレーションを受けて小説を書いたかを追求したものです。

　『セザンヌとゾラ―その芸術と友情―』は中学時代から親友だったセザンヌとゾラがいかに緊密な協力のもとに相互の芸術を育てていったかを現地調査も踏まえて書きました。その際、セザンヌが晩年にモンマルトルに借りていたアトリエが、バカンス用に貸し出されているのをみつけて、借りることができたのは実に思いがけない幸運でした。

(2002年11月　教官アーカイヴ展に寄せて)